

陽光がふり注ぐ南カリフォルニアのアトリエ
で芸術を語るニキ・ド・サン・ファール氏



彫刻シリーズ「ナナ」に安ど感

アメリカ・南カリフォルニアの陽光がふり注ぐアトリエで、少女のように目を輝かせながら自らの人生を、芸術を語り続けた。

「十一歳の時に入ったニューヨークの学校で、『女性は世の中のために何かをすべき権利と義務がある』と教えられました。それが、シャンと囁き続けた。

ニキ・ド・サン・ファール氏

彫刻部門

「私は口紅が好きだし、お客さんにお茶を入れるのも好き。女性の特徴を放棄したくはない。男性と同様の『表現の権利』を求めただけです」

フランスの裕福な銀行家の娘としてパリに生まれた。世界大恐慌のなか、父は破産し、母は同時に父の不倫を知り、二重の打撃を受ける。幼いころ、母に「わが家に不運をもたらした子」と言われた。△叛逆▽への伏線だった。

ニューヨークでの青春時代、写真モデルとして雑誌ウオークやライフの表紙を飾った。二十歳でアメリカ人作家と結婚。娘と息子をもつけるが、極度の精神衰弱に、リハビリに絵を描き始めた。美術学校に学んだことはない。天賦の才能が自由に羽ばたいた。

一九六二年に開いた「射撃絵画」が美術界に衝撃を与える。絵の具を入れた袋をキャンバスに右うで埋め込み、ライフル銃で撃つ。「私がかかえていた家族や社会に対する怒りを、射撃絵画が解放してくれた」

「私は口紅が好きだし、お客さんにお茶を入れるのも好き。女性の特徴を放棄したくはない。男性と同様の『表現の権利』を求めただけです」

九八年、イタリヤ・トスカナ地方に二十年の歳月をかけた「タロット・ガーデン」を完成させた。森の中に巨大な女帝がどうかとすわり、太陽、月、悪魔、正義など二十二の古いカードのシンボルたちが点在する小宇宙。

自費を投入してこの巨大庭園を建設したのは、二十五歳の時訪れたスペイン・バルセロナのカウディの公園で受けた大啓がもとになっている。その時、『いつの日か、人々を幸せにする庭をつくりなさい』と神がささやいたのだという。

それは、少女のころいつも「困難に打ち勝つおとぎ話の主人公になりたかった」という夢の実現でもあった。

△1930年10月29日生まれ、69歳。△国籍・フランス△

離婚。生涯の芸術パートナーとなるイスラのジャン・ティンガリー氏（九一年死去）との生活により、作品は絵画から彫刻へと発展する。

妊娠し、おなかが大きくなっていく友人を見て思いついた彫刻シリーズ「ナナ」。豊かな胸とたくましい腹が、見上げる者に不思議な安ど感を与える。とくに六六年、ストックホルム近代美術館に展示された巨大なナナは、胎内めぐりの遊園地だった。「（女性の）高痛をテーマにするのをやめ、喜びを選んだ」。ナナは、すべてを抱擁する大地母神なのだ。